令和３年度　旧今治管内　生徒指導夏季研修会　実施報告書

今年度の生徒指導夏季研修会については、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とした。そこで、生徒指導夏季研修会に代わり、教職員支援機構の講義動画を活用した研修を実施した。

１　研修内容

教職員支援機構（https://forms.gle/v3NAYXXVmSosiQNi6）のオンライン講座（講義　動画）を視聴し、自校の生徒指導上の課題解決に向けて参考になった講義内容や２学期以降に実践したいことを考える。

２　研修方法

以下の方法で、校内研修または自己研修を行う。

⑴　各校の実態や課題に応じて、次の中から講座を選び、視聴する。

ア　いじめ問題（https://www. nits. go. jp/materials/intramural/theme. html#theme04-04）

○　校内研修シリーズ No45：ネットいじめの未然防止及び解決に向けた指導と対応

○　校内研修シリーズ No48：いじめ問題に関する保護者との連携、信頼関係構築の在り方

○　校内研修シリーズ No56：いじめのとらえ方と予防

イ　生徒指導・教育相談（https://www. nits. go. jp/materials/intramural/theme. html#theme04-05）

○　校内研修シリーズ No13：生徒指導

○　校内研修シリーズ No14：自殺予防

○　校内研修シリーズ No15：教育相談に関するマネジメントの推進

○　校内研修シリーズ No47：不登校児童生徒の支援と教育相談

○　校内研修シリーズ No79：コーチングのスキルと活用Ⅲ
～不登校解決のためのリソースを探す～

○　校内研修シリーズ No91：学校における児童虐待対応のポイント

⑵　オンライン講座の内容について、協議または思案する。

３　協議内容

⑴　生徒指導全般について

ア　自校の生徒指導上の課題解決に向けて参考になった講義内容

○　問題行動には、様々な悩みや心身の問題、家庭環境などの背景があるということを分かろうとすることが大切である。

○　問題が起きてから対応する従来の生徒指導ではなく、開発的・予防的な「育てる」生徒指導へのシフトが大事になってくる。

○　子どもの自己指導能力（その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行する能力）を育成するために、次の三つの働き掛けを教科指導の中で行うことが大切である。

①　自己存在感（自分はかけがえのない存在で、大切にされていると思える）を与える。

②　共感的人間関係（相互に人間として尊重し合う態度で、自分を語り、共感的に理解し合う人間関係）を育成する。

③　自己決定の場（自分で考え選択する機会）を与える。

○　全教職員の協働による組織的な生徒指導体制が必要である。

○　指導の共通理解を図るために生徒指導の理論化が必要である。

○　これからの生徒指導には、次の四つの力が求められている。

①　アセスメント力（児童生徒の個別的理解と社会状況への理解）

②　カウンセリング力（面接や介入における臨機応変で柔軟な対応）

③　マネジメント力（学校目標・生徒指導目標の具体化と取組の組織化）

④　コーディネート力（同僚・関係機関との連携）

○　子どもの心に寄り添い、受容する態度が相談を受ける者にとって大切である。

○　原因追及よりも解決志向で子どもと向き合うことが大事である。

イ　２学期以降に実践したいこと

○　子どもの問題行動に対して指導する際、「聴く」よりも「訊く（何をした？どうなった？どう思った？どうする？これからは？）」ことを重視し、指導後に子どもが前向きに考えられるようにする。

○　起きた問題に対応する生徒指導だけでなく、全ての子どもに対して、教科指導の中で、自己指導能力を育成することで、開発的・予防的な生徒指導を行う。

○　協働的な生徒指導を行うために、多くの教職員とコミュニケーションをとり、人間関係づくりを行う。

○　報告・連絡・相談を徹底し、組織として学校全体で問題解決に取り組めるようにリーダーシップをとる。

⑵　いじめについて

ア　自校の生徒指導上の課題解決に向けて参考になった講義内容

○　社会通念上は、好意と捉えられる言動でも、行為を受けた児童が苦痛を感じていれば、法的にはいじめに該当する。このことを十分に理解して指導に当たる必要がある。教師の言動にも、そのようなものがないか考える必要がある。

○　早期発見と未然防止をしっかりと区別して捉え、いじめが起こらないように未然防止に力を入れることが大切である。

○　未然防止のために、普段の授業や特別活動など、全ての子どもに対する日々の教育活動の中で生徒指導を行っていくことが大切である。

○　いじめの未然防止のための意図的な働き掛けが、子どもが楽しい学校生活を送ることにつながり、結果として、いじめが起こりにくい環境になる。

○　子どもは誰がいじめの標的になるか分からない緊張感の中、日々過ごしている。楽しくではなく、一生懸命SNSで他者とつながっている。そこに理解がないと、子どもからの信頼は得られず、インターネット上のいじめが教員の目の届かないところで深刻化していく。

○　いじめの加害者と被害者の関係が頻繁に変化する。子どもは教師や保護者に相談をしない。いじめのターゲットはすぐに代わるから、それまで耐えればいいと考えている。

○　大人の介入が難しいインターネット上では、子ども同士で解決する必要があるため、インターネット上のいじめに対する未然防止のためには、質の高い傍観者（加害者の味方をせずに、自分も被害者も加害者も守れるように行動できる人）の育成が大切である。

○　質の高い「傍観者」を育てるためにも、インターネット上のいじめの事例を子どもに提示し、教師が教えるだけでなく、子どもと一緒に考えることが必要である。教員は、子どもがインターネットと賢く付き合えるように、何をすべきなのか考えていく重要な役割を担っている。

○　保護者の意見を傾聴し、受け止める姿勢が大切である。感情的になられてもその背景に何があるのかを考えながら、冷静に話し合うことが大切である。

イ　２学期以降に実践したいこと

○　全ての子どもが学校を楽しいと思える環境づくりに努める。

○　苦痛を感じている児童生徒に気付き、いじめをエスカレートさせない雰囲気を作れる集団づくりに努める。

○　一人一人の子どもが心の居場所を持てるように、全ての教育活動の中で子どもの良い行動や発言を積極的に褒めたり、認めたりする。

○　よく分かる授業、子どもが活躍できる授業、達成感や充実感を持つことができる授業を実現することで、未然防止に努める。

○　日常的な生徒指導は、授業だけでなく、休み時間や委員会活動等の全ての学校の教育活動に及ぶことを念頭に置いて、自学級や自学年だけでなく、学校全体の子どもの様子にも目を配り、いじめや非行活動につながらないように、声を掛けたり関わりを持ったりする。

○　立場に関係なく、相談してくれた子どもに寄り添いながら、解決方法を模索できるような指導を行う。

○　１人１台端末を活用し、それぞれの発達段階にあった、SNSなどのルールや正しい扱い方について伝える。

○　インターネットの安心・安全な利用の仕方について具体例を示した資料を配布する。

○　授業で様々な例を提示し、解決策を共に考えるような授業を実施する。

○　親子で参加する情報モラル教室を開催し、教師も含めて大人も一緒に学ぶ。

○　職員研修でネットいじめの事例を挙げ、指導や対応の在り方を研究協議する。

○　いじめが起こった学級の担任の精神的な負担が大きくならないよう、チームで対応するとともに、学級担任のケアも行う。

○　教員同士で、児童や教育活動についての報告・連絡・相談を行ったり、どのように学級や学年で児童への対応を行っていくか統一したりする。

○　全教職員、SC、ハートなんでも相談員などと話し合い、多角的に児童生徒の実態を把握できるように連携をとる。

○　日々、教師としての言動を振り返り、反省する。

○　保護者に連絡や面談をする際には、保護者の気持ちをしっかりと受け止めながら、今後の対応を確認する。また、保護者への対応を全教職員で共通理解して進める。

⑶　不登校について

ア　自校の生徒指導上の課題解決に向けて参考になった講義内容

○　情熱と誠意を持ち、専門的技術を生かして支援する。

○　不登校の子どもの支援は、教師が主体になり、専門家の力を借りて、学校が取り組む。

○　不登校の子どもは、ガソリンの少ない自動車である。解決のためには心的エネルギー（ガソリン）を入れる必要がある。教師は学校と家庭を道路でつなぎ、自動車を上手に動かす専門的技術を身に付ける必要がある。

○　心的エネルギー（ガソリン）と学校への関心度（車の向き）を確認し、効果的なアプローチができるよう、教員が情熱を持って取り組むことが大切である。

○　心的エネルギーが溜まり、学校への関心度が高くなっても、子どもはまだ、登校したい気持ちとしたくない気持ちが葛藤している状態にあることを理解する。登校したい気持ちが、したくない気持ちを上回れば、登校できるようになる。登校したい気持ちが高まるような刺激を少しずつ与えていく。

○　専門的な技術を身に付けることが大切である。

①　スモールステップで取り組む。(やれる範囲で少しずつ)

②　大義名分をつくる。(×：保健室で30分過ごそう。　○：身体計測をしよう。)

③　本人に選択させる。(×：登校するかしないか。　○：普通通り登校するか遅れて登校するか。)

④　保険を掛ける。(チャレンジして上手くいかなかった時を想定し、フォローの仕方を予め考えておく。)

⑤　子どものプライドを守る。

○　再登校できるようになっても、真の解決になっているか見極める必要がある。

①　過剰適応になっていないか、帰宅後や休日の様子にも注意する。必要に応じて、教師側からブレーキをかける。

②　自分で考え、自分で判断し、自分の足で歩めるようになっているか、見極める。

○　不登校の「原因」と「きっかけ」と「要因」は違う。不登校の解決で大切なことは、原因を探すことではなく、要因を分析すること、つまり分かろうとすることである。

○　不登校解決のゴールは、子どもが将来、社会的自立をすることである。

○　「GRROWモデル」で解決の手立てを見付ける。

G：共通のゴール設定（Goal）＝最終的にどうなって欲しいか

R：現状把握（Reality）＝今、どんな状況なのか

R：選択肢や資源の発見（Resource）＝使える人・もの・時間

O：視点を変えた選択肢の創造（Option）＝もっと他には？

W：目標達成の意思・約束（Will）＝いつからする？

○　「不登校にならないための魅力ある学級づくり」のために開発的・予防的生徒指導を行う。

①　「心の居場所」となる学級

②　学ぶ意欲を育む指導

③　特別活動の充実

④　基礎学力の定着に向けた教科指導

⑤　安心して通うことができる学校

イ　２学期以降に実践したいこと

○　長期休業明けの一人一人の状態を見極める。

○　不登校傾向にある子どもに対して、行事など、様々なタイミングで先を見据えた話を行い、目指すゴールなどを明確して、登校意欲を高める。

○　全教職員と密な連絡・相談体制が取れるよう、普段からコミュニケーションをとる。

○　家庭・学校・関係機関等が連携して、GRROWモデルなどの具体的な対策を講じて、将来を見据えた指導を進める。

○　不登校傾向の子どもに対する支援に関して、具体的なスキルなど、教職員で意識統一を図る研修を行う。

○　SCやSSWとの連携をより強化した教育相談体制を確立し、全教職員がそれぞれの子どもに対してゴールを同じにした指導ができるようにする。

○　特別支援教育との連携にもっと積極的に取り組む。